

poco a poco

パラグアイ便り 2024/02/01 Número12

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教員

【パラグアイで過ごしたクリスマス】

クリスマスイブは、パラグアイでの家族たちと過ごしました。日本では、クリスマス恋人や友人と過ごす文化もありますが、パラグアイでは家族と過ごすことが一般的だそうです。もし恋人や友人とも一緒に過ごしたい場合は、家族の集まりに招待するそうです。イブの夜に家族で集まり食事をし、12時ちょうどになったときには「フェリス ナビダッド」（スペイン語でメリークリスマスという意味）と言いながら、みんなでハグをします。パラグアイでは、日常的な挨拶や会話でもハグをします。言葉だけに頼らずに「あなたのことが好きだよ。」「あなたの味方だよ。」「大丈夫だよ。」と、温かい気持ちを伝え合うために老若男女関係なくハグをする文化が、私はとても素敵だと思っています。

今年のクリスマスイブとクリスマスは残念ながら両日とも大雨でした。イブの夜はずっと停電していたため、キャンドルの灯りで食卓を囲みました。いつもは厄介だと思う停電も、この時だけは悪くないなあと思えました。



“クリスマスツリー”と“Pesebre”という名前のキリスト降誕の場面を表した人形一式を用意するそうです。



パラグアイの子どもたちはクリスマスイブにサンタさんからプレゼントをもらわず、1月6日(三賢者の日)に親からプレゼントをもらう家庭が一般的だそうです。靴下ではなく靴の中に欲しいものを書いた手紙を入れて欲しいそうです。



【新年を迎えました】

クリスマスと同様に年越しを、日本から遊びに来てくれた友人とパラグアイの家族たちと一緒に迎えました。私の友人をすぐに家族の一員として迎え入れてくれた家族たちのことがもっと大好きになりました。色とりどりの美味しい料理を食べ、12時ちょうどには「フェリス アーニョ ヌエボ」(スペイン語であけましておめでとうという意味)と言いながらシャンパンで乾杯をしました。その後は、花火や爆竹で盛り上がりました。普段から花火や爆竹、バイクのエンジンの爆発音などがよく聞こえてきますが、この日は一晩中「パンツ パンツ」という音が鳴り止みませんでした。



【ひとこと】

早いもので残りの任期が半分(1年)となりました。振り返ると1分1秒が長すぎると感じたとき、思わず涙が出てきたとき、はらわたが煮えくりかえる思いをしたときなど、いろいろありましたが、一度も病院にお世話になることなく心身ともに健康に過ごせたことへの感謝と誇りを感じています。引き続き健康維持と防犯対策に関しては気を緩めることなく、努めていこうと思います。

活動に関しては、その都度正面から向き合い全力で取り組んできたつもりですが、果たしてそれが現地の方々の役に立てたかどうかは自信が持てません。帰国する際にもその思いは拭いきれないかもしれませんが、無駄なことは1つも無いと信じています。良かれと思ってとった行動が、すべて意図した通りに誰かの役に立てるとは限らないと思っています。しかし、思わぬところで誰かが影響を受けてくれたり、繋いでくれたりするなど、そういった小さな奇跡に遭遇したことも多々あった一年でした。今後も一つ一つの問題やパラグアイの人たちに対し、誠実に向き合い続けていこうと思います。

